

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
B-141	12-312	慶應義塾大学
題名（原題／訳）		
<p>The association of the appetitive peptide acetylated ghrelin with alcohol craving in early abstinent alcohol dependent individuals. 断酒後初期のアルコール依存症者におけるアルコール渴望と食欲刺激ペプチドアセチルグレリンとの関係。</p>		
執筆者		
Koopmann A, von der Goltz C, Grosshans M, Dinter C, Vitale M, Wiedemann K, Kiefer F. Source		
掲載誌		
Psychoneuroendocrinology. 2012 Jul;37(7):980-6. doi:		
キーワード		
グレリン、アルコール渴望、報酬経路		
要 旨		
<p>目的： 最近の前臨床および臨床試験により、グレリンは食欲とエネルギー出納を調整する食欲調整的役割をもつことが示唆された。また、前臨床試験では嗜癖関連報酬経路の神経生物学の分野におけるグレリンの重要な役割を支持する結果を報告した。そして、アルコールと薬物（麻薬）の自己摂取と条件付け場所選好に影響を及ぼすことが示唆されている。一方、臨床データではグレリンとアルコール渴望の間に関連があることは証明できていない。おそらく臨床研究が活性のあるアセチル化体のグレリンではなく、薬理学的に不活性なプレプロホルモンのグレリンを分析したためであろう。</p> <p>方法： 61 人のアルコール依存のために入院した男性患者を対象とした。本研究では、入院時と断酒後の 2 回の血液サンプルで、活性型とおよび総グレリンの血漿濃度を評価した：入院後 12-24 時間で離脱発症時の、また 14 日の断酒後の 2 点である。この間に、患者のアルコール渴望（強迫の飲用尺度；OCDS）、鬱の症状（ベックうつ病調査表;BDI)、そして、不安（State Trait Anxiety Inventory;STAI）を調査した。；アルコール依存症の重症度は、アルコール依存症スケール（ADS）を使用して評価した。</p> <p>結果： 両方の血液サンプルで活性型のグレリンの血漿濃度とアルコール渴望に有意な正の相関を見つけた。活性型グレリンの血漿濃度は、断酒後早期に有意に増加した。線形回帰モデルでは、1 日目の活性型グレリンの血漿濃度、ADS、BD のスコアは、OCDS 合計スコア ($p < 0.0001$) の相違の 36%を説明した。14 日目の同じ因子は、54%を説明した ($p < 0.0001$)。全グレリンの血漿濃度と患者のアルコール渴望の間に関係はなかった。</p> <p>結論： 本研究の結果は、生物学的に活性のアセチル化グレリンがアルコール依存症患者でアルコール離脱と断酒後早期に、報酬関連の渴望に関与していることを示唆する。中脳腹側被蓋野（VTA）の中枢性成長ホルモン分泌促進物質受容体（GHS-R1A）に拮抗性のグレリンは、アルコール依存患者の渴望と再発に対する将来の新しい治療の薬理学的目標となる可能性がある。</p>		